災害に関する歴史資料調査報告会1

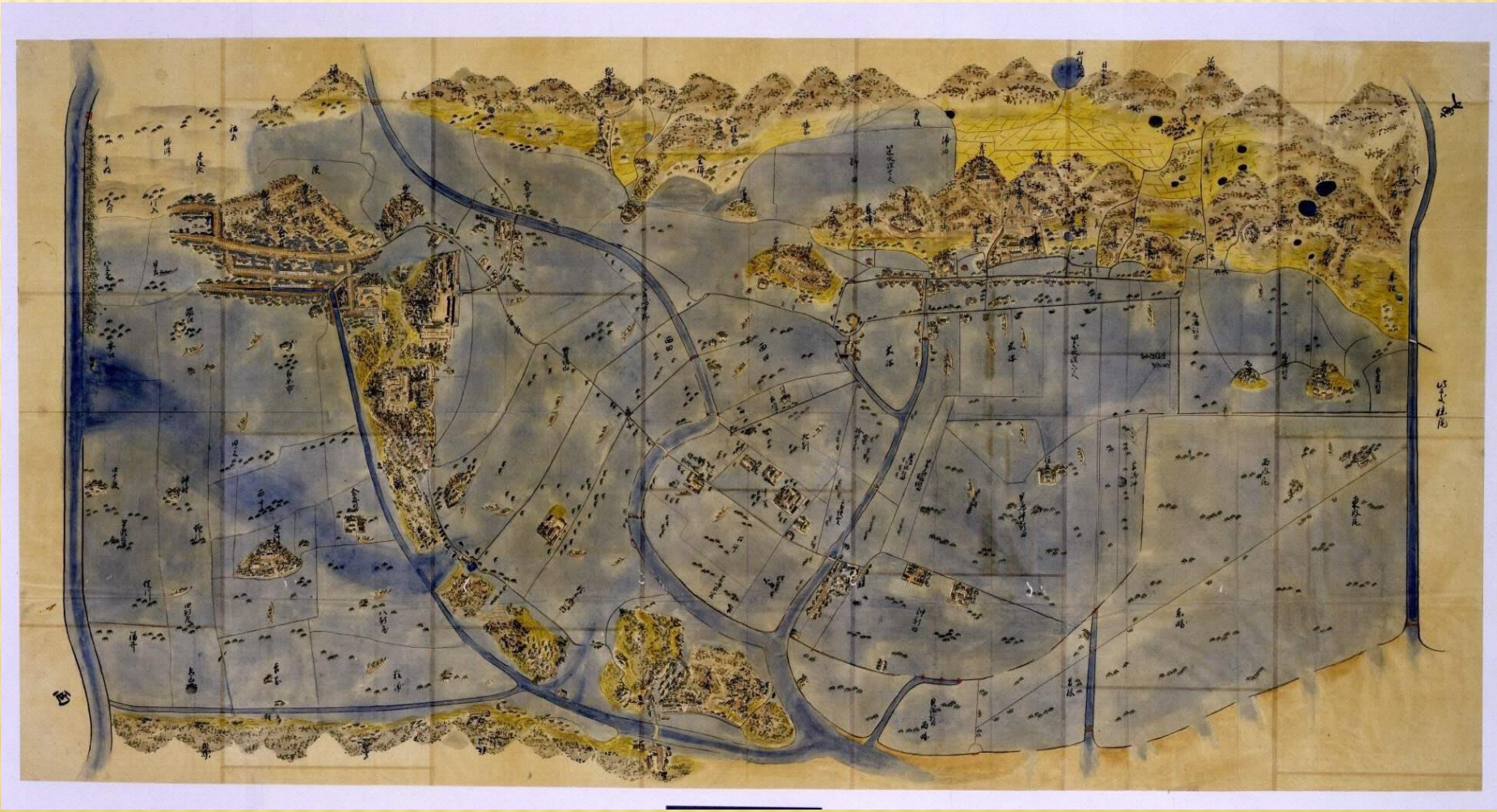
大橋家文書にみる嘉永3年の水害と倉敷

令和3年1月30日（土）

倉敷市総務課歴史資料整備室

山　本　太　郎

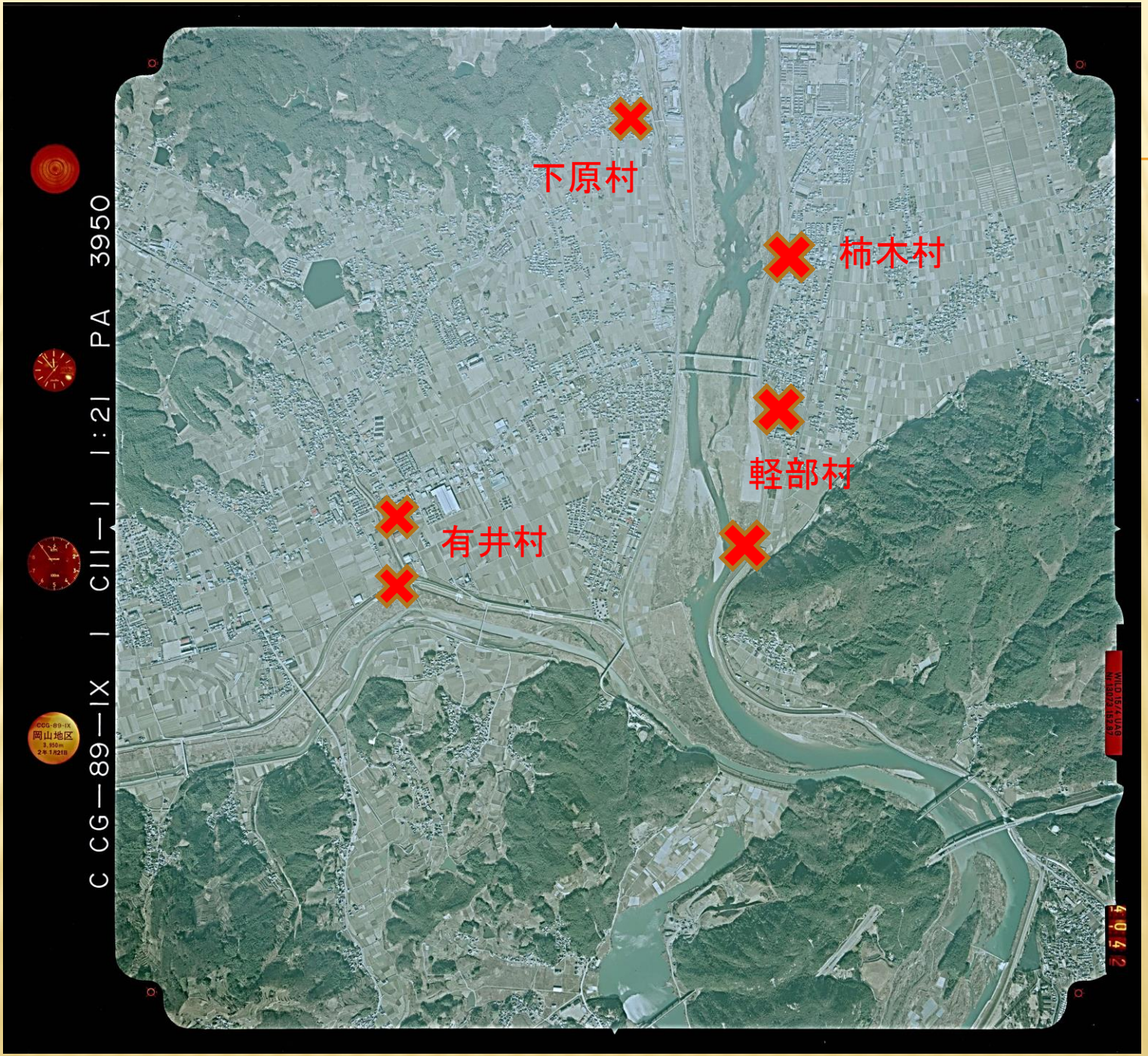
1　嘉永3年の水害
（倉敷市所蔵亀山家文書58）



1　嘉永3年の水害

- 嘉永3年（1850）5月27日～29日・6月1日と雨が降り続き，まず6月1日（現在の新暦では7月9日）晩に有井村の登り土手（眼田谷川堤。末政川左岸堤防）を水嵩が増した河水が乗り越えた。夜には有井村の金の手西堤防（小田川北堤と末政川西堤の接続部角地）が決壊し，河水が下二万・八田・矢田へあふれた。6月2日朝，一帯は湖水で，岡田から船で川辺へ行った。また洪水が高梁川右岸堤防を越えて下原村（総社市下原）の人家へ押し込んだ。（畑和良「真備町域における江戸時代～明治初年の水害治水史」『倉敷の歴史』第30号，2020年））

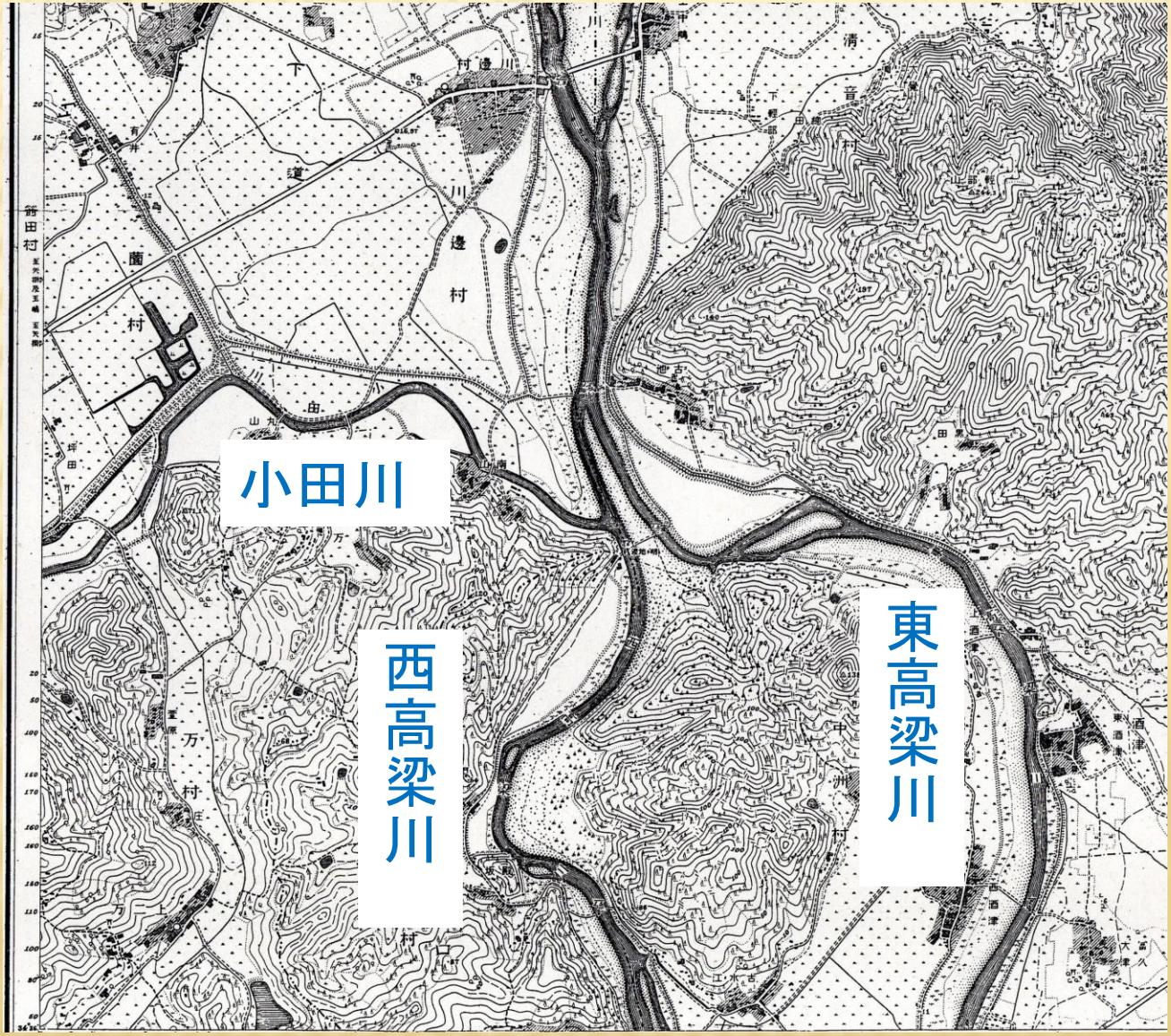
平成2年　国土地理院空中写真
CCG891X



1　嘉永3年の水害

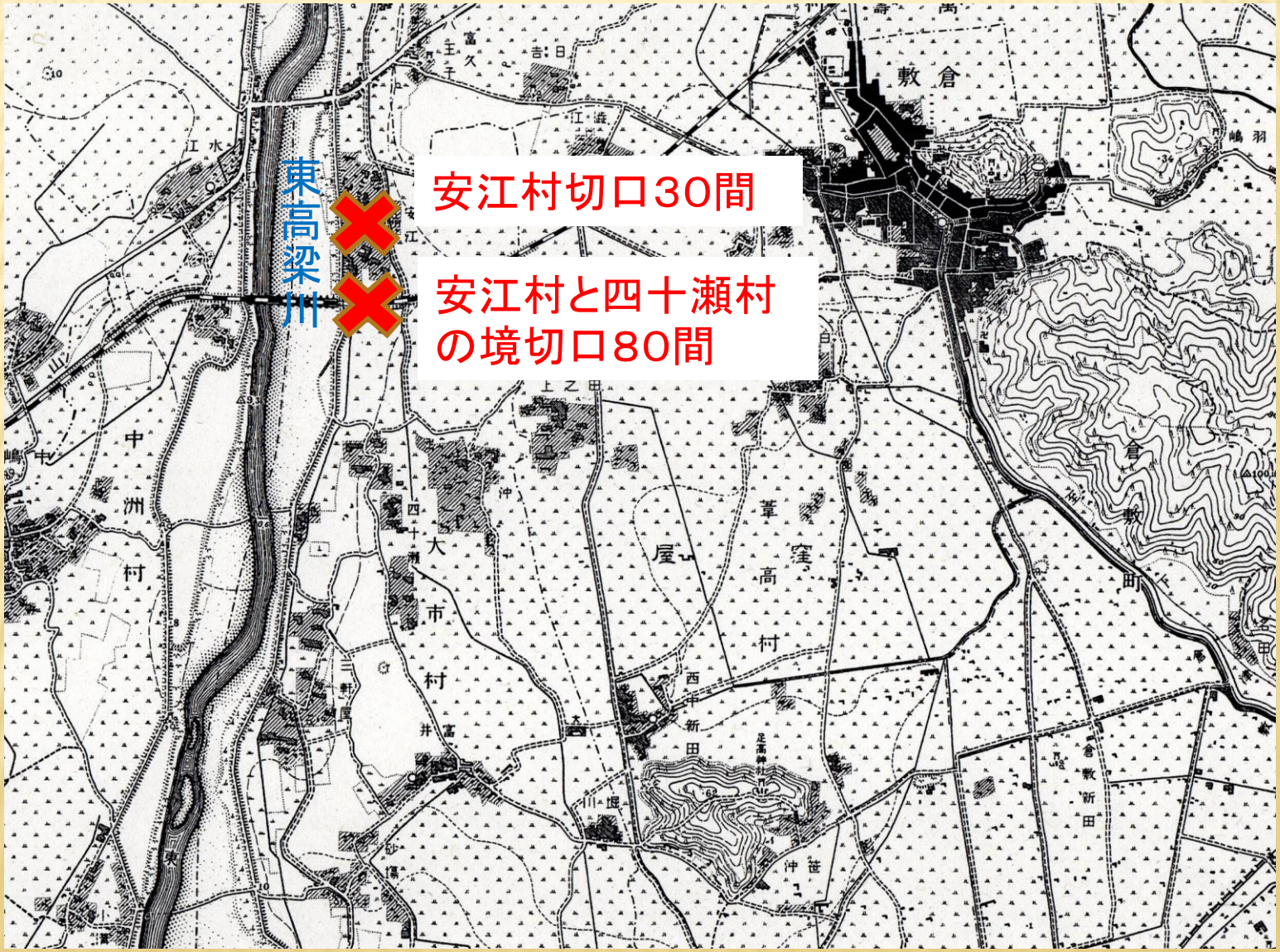
- さらに東高梁川が満水になり，６月３日夜に安江村の元庄屋四郎右衛門宅後ろの左岸堤が30間（約54㍍）ほど切れ，さらに安江村下手左岸堤と四十瀬村の左岸堤も80間（約150㍍）ほど切れた。このため川の東側の約60カ村の土地へ濁流が流れ込み，一面湖水を湛えたようになった。
- 現在の倉敷市安江から岡山市汗入・内尾あたりまで水が及んだ（東西約10㎞）。
- （『倉敷市史　第五冊』p46～47，「嘉永三年戌六月大水記録」（倉敷市所蔵難波家文書22-1），「高梁川嘉永洪水絵図」『早島の歴史　3』付録，「高梁川嘉永洪水絵図を読む（上）（下）」『こうほう早島』2019年6・7月号）

1　嘉永3年の水害

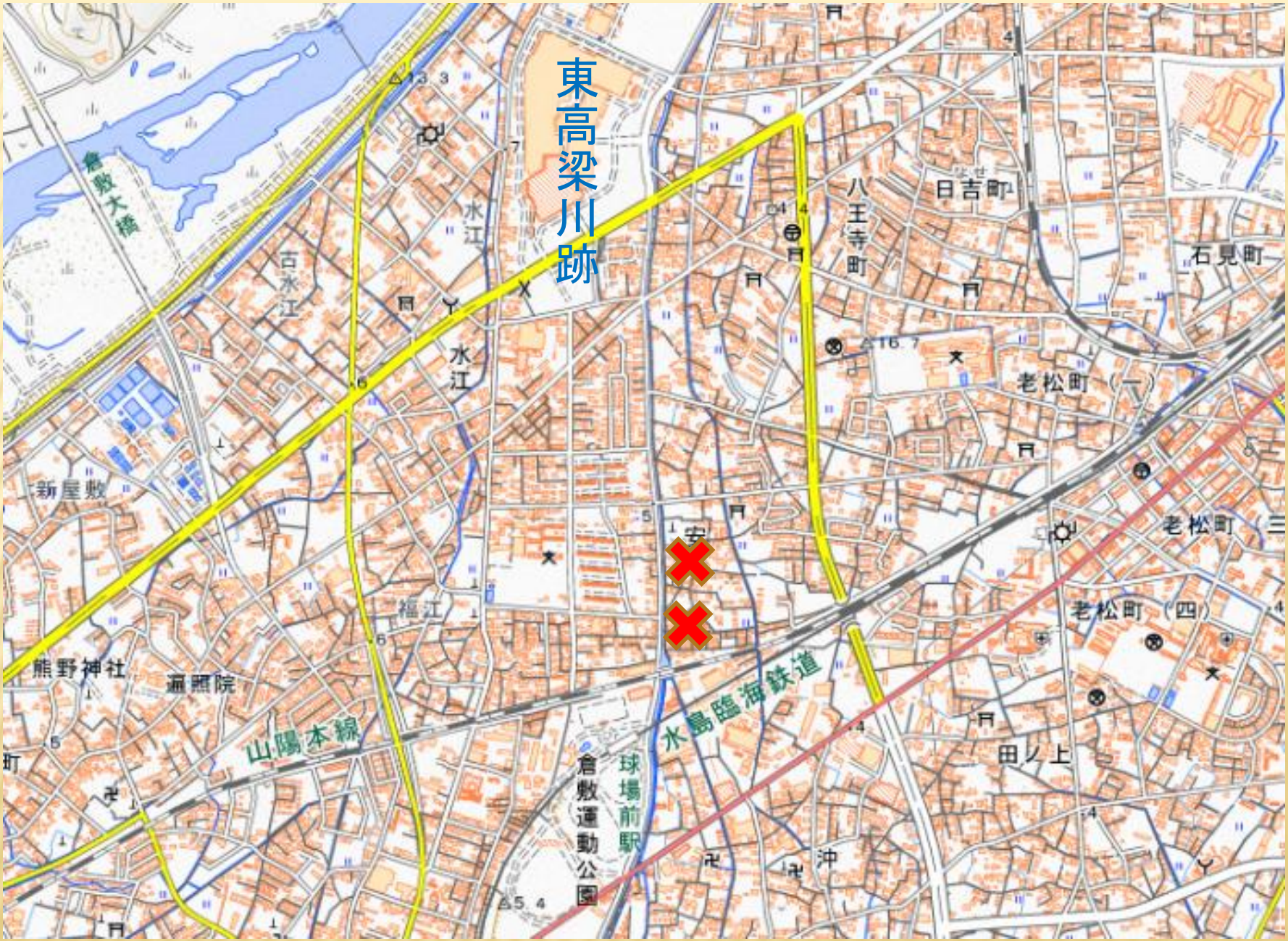


大日本帝国陸地測量部発行二万分一地形図（川辺村）明治三十年測図をもとに作成

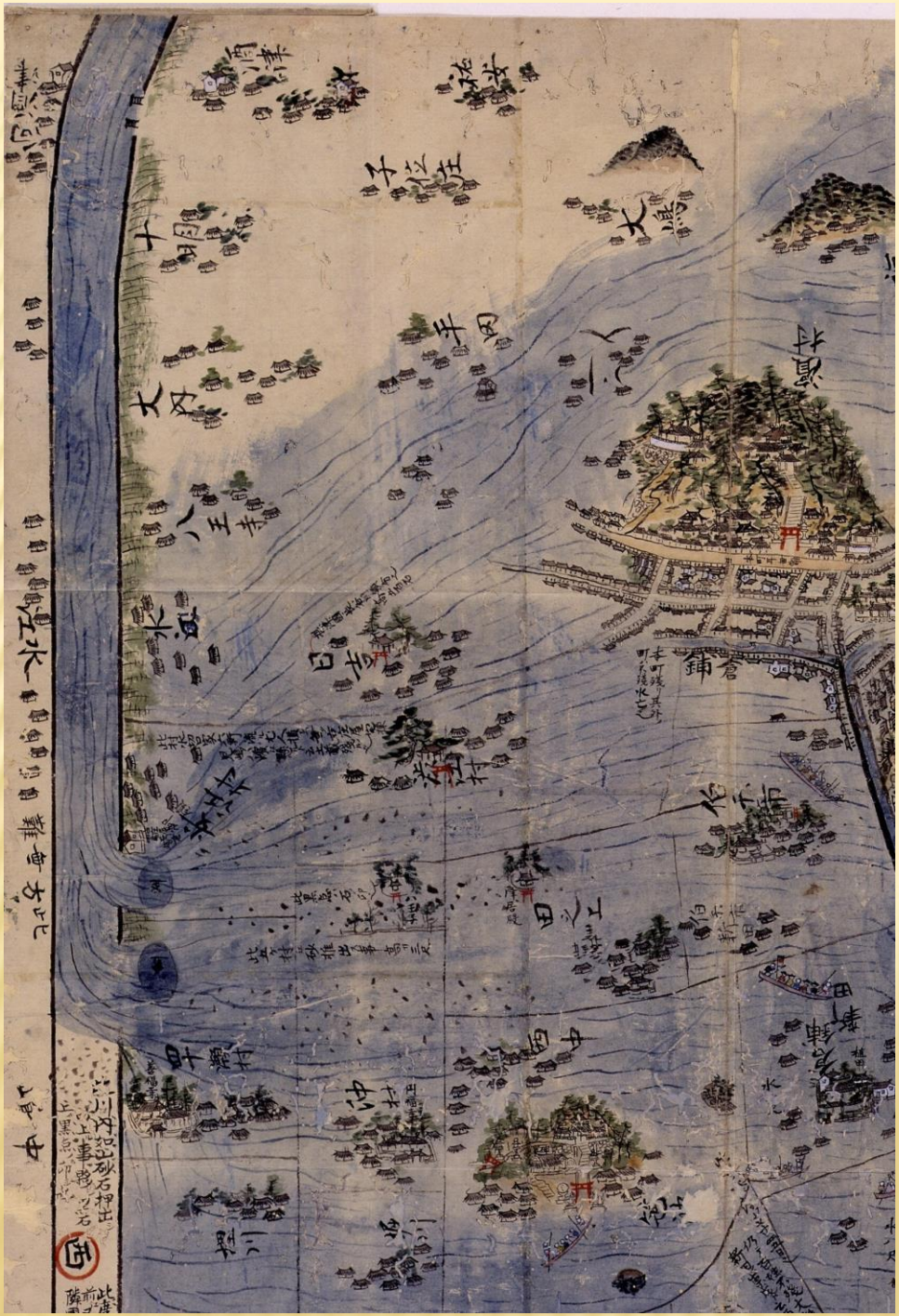
1　嘉永3年の水害



大日本帝国陸地測量部発行二万分一地形図（倉敷）明治三十年測図をもとに作成

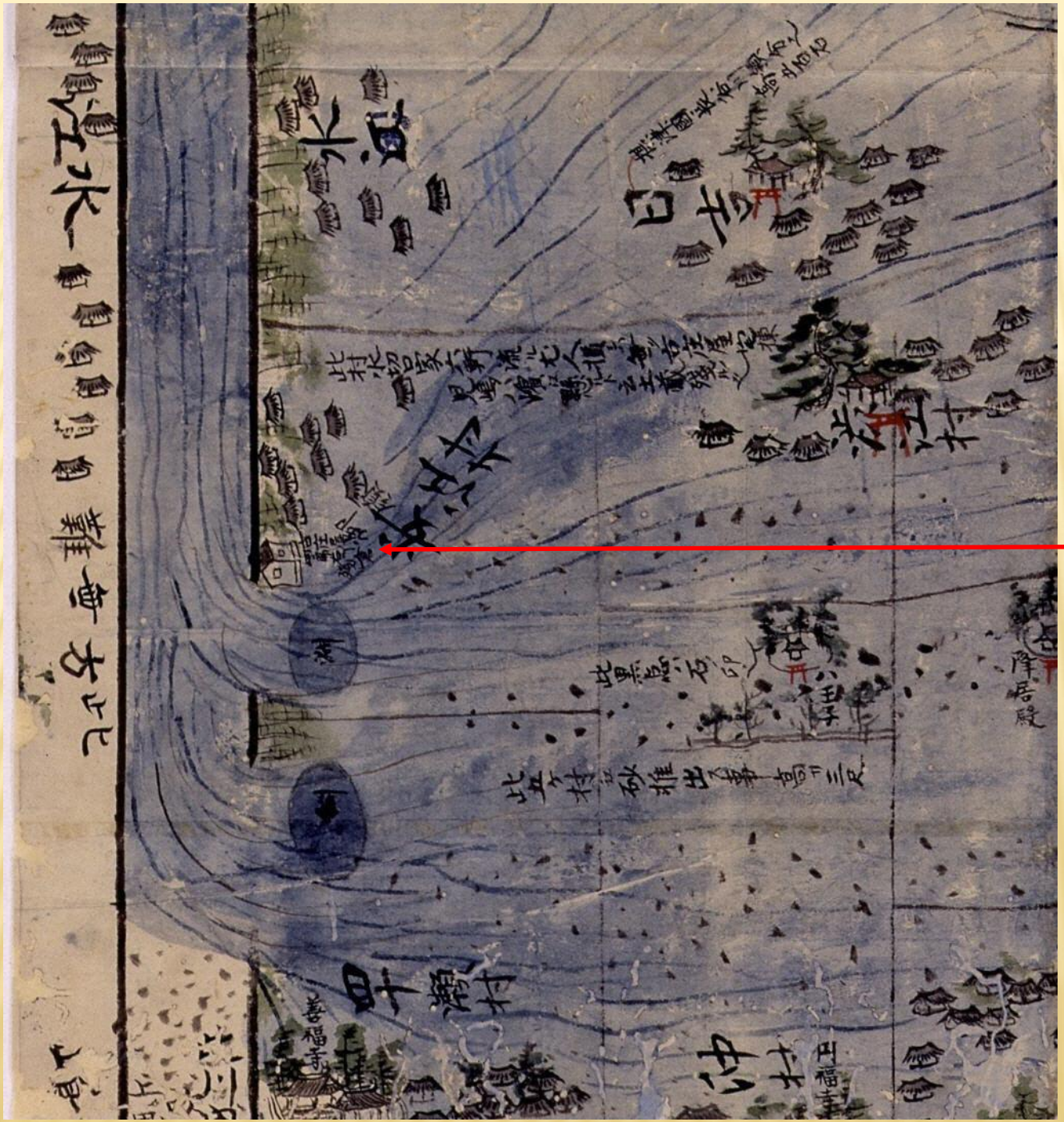


出典：国土地理院電子国土Webをもとに作成



「高梁川嘉永洪水絵図」（早島町教育委員会所蔵）

川入村名主秋岡惣五郎筆「先考遺筆」によると，６月３日夕は格別に水が増し，生坂・西坂・三田から加勢夫が来て，秋岡は大内西渡場かみを引き受けて杭木を打たせていた。酒津から十明が危なく，人夫を貸してくれと頼まれたが請場も危なく，夫役を分けることは難しかった。倉敷代官藤方彦一郎は酒津へ出張。手代3，4人は堤を廻っていた。
夜，安江村の者が来て，堤が切れたので大勢酒津の方へ逃げていった。（『倉敷市史　第五冊』p46～47



「高梁川嘉永洪水絵図」（早島町教育委員会所蔵）

古庄屋四郎右衛門残倉

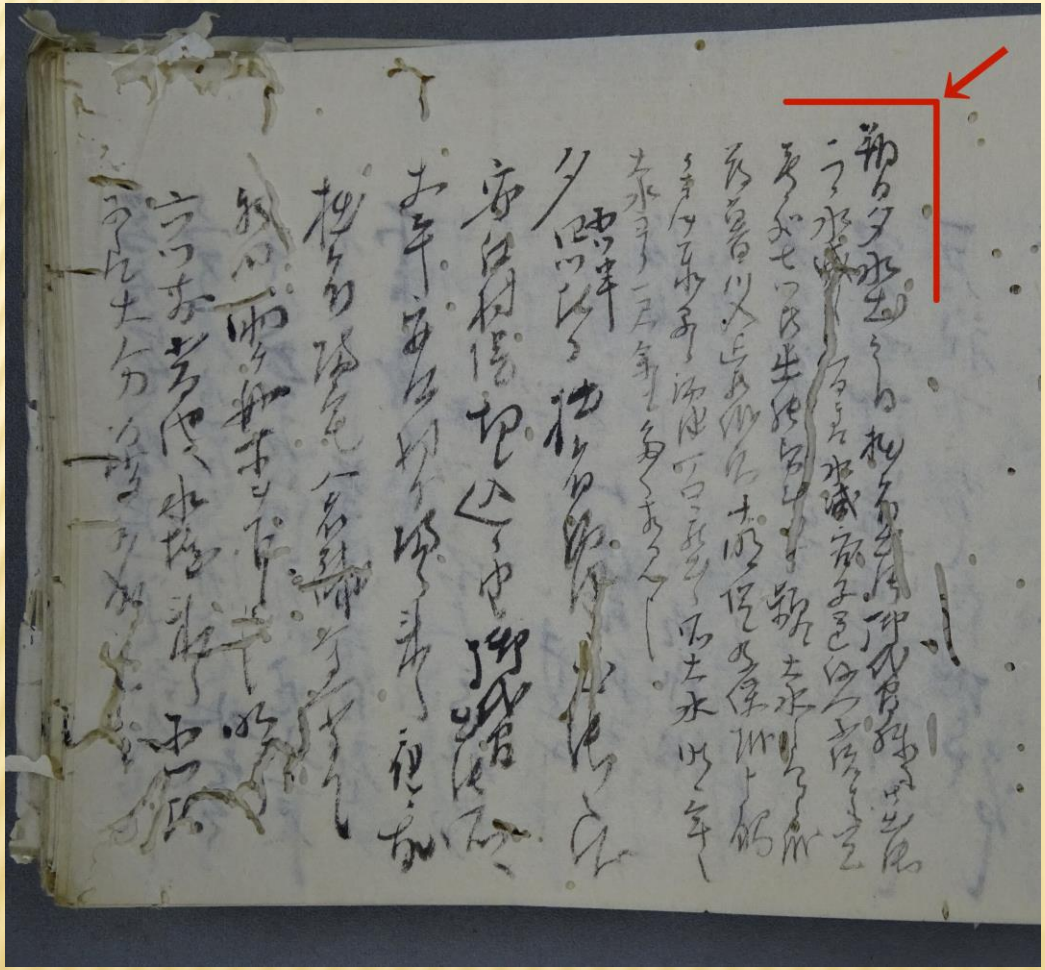
２　倉敷村の豪農商・大橋正直の日記

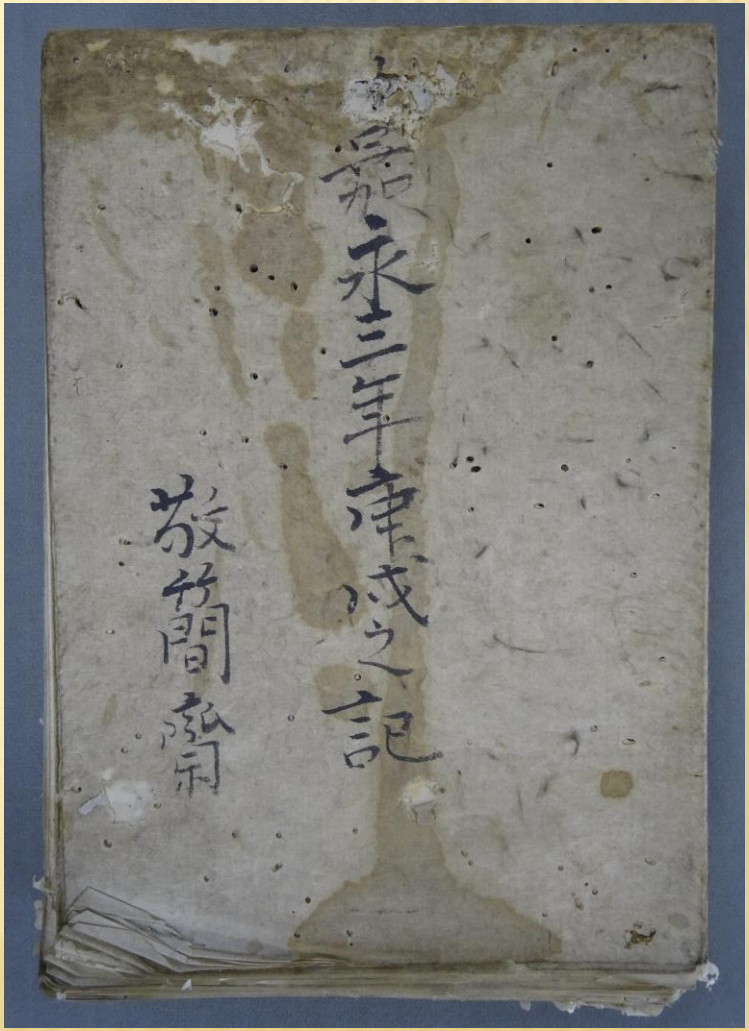
大橋家：倉敷村で地主と金融業

五代平右衛門正直
・文化7年（1810）生まれ
・文政11年（1828）19歳で倉敷村年寄
・天保5年（1834）代官陣屋内に建設された教諭所・明倫館の世話役
・嘉永2年（1849）庄屋格年寄
・嘉永3年当時庄屋格年寄
　41歳

大橋平右衛門正直（七十六歳）（倉敷市所蔵）

２　倉敷村の豪農商・大橋正直の日記





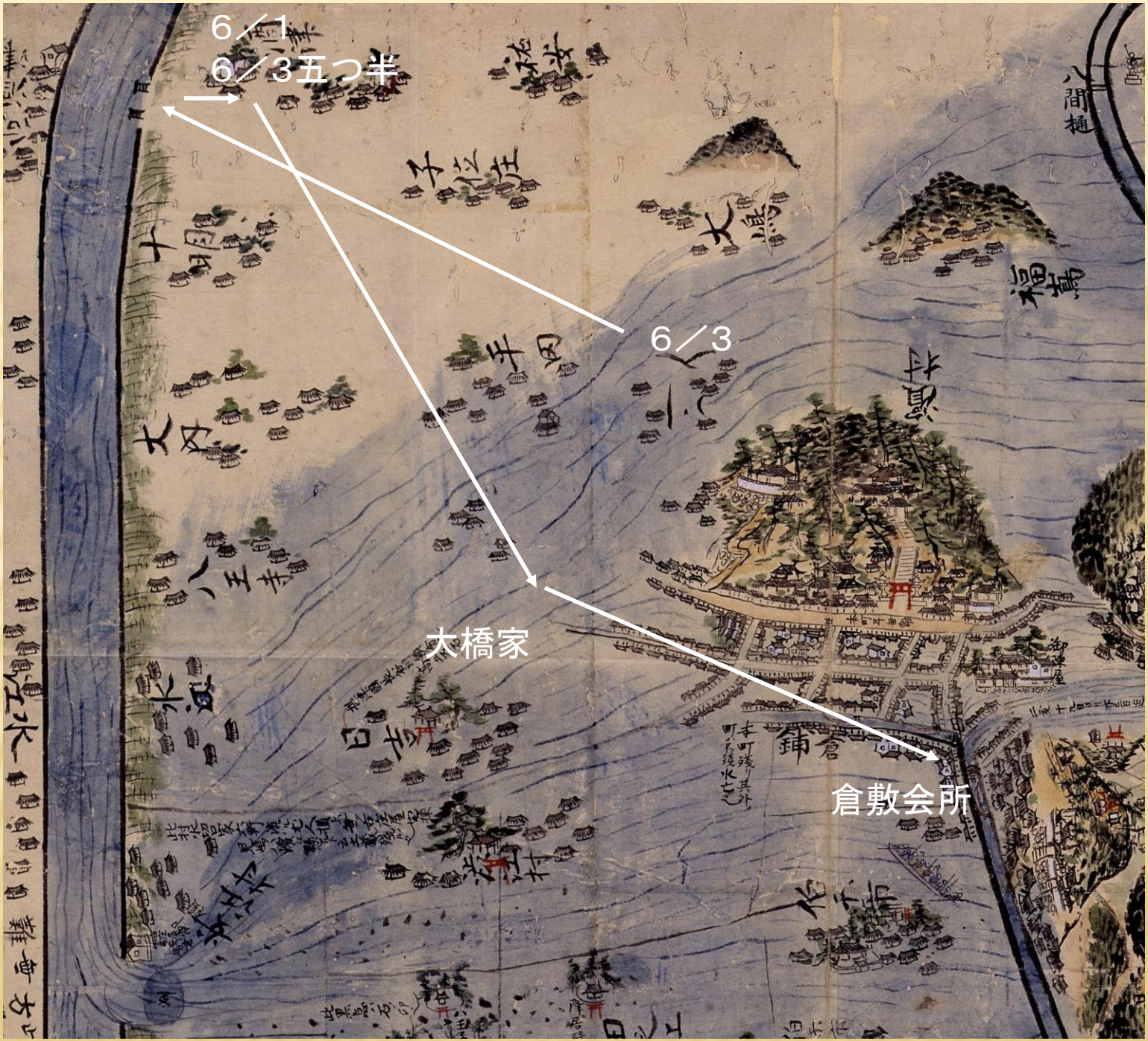
大橋紀寛家文書別1―19―G－2

朔日夕水出ニ付拙者出張、御代官様も御出張
二日水減[ ]日ニは水減最早懸役人不詰とも宜
御座候処、七ツ頃出張勇三[ ]頻ニ大水之旨申越
薄暮川入迄罷越候所，十明堤へ及浸越申触
声ヲ承早々酒津一ノ口罷出候所、大水昨々年之
大水ヨリ一尺余も多く相見申候

・（5月27日から雨が降り続いていた）
・6月1日夕に水が出たので大橋平右衛門は出張し，倉敷代官も出張した。
・6月2日には水が減った。
・6月3日には水が減り，もはや係の役人が詰めなくてもよくなったところ，七ツ（午後4時）頃出張していた勇三郎（倉敷村年寄）から頻りに大水のことをいってきたので，薄暮に川入まで行ったところ，水が十明堤を浸し越したとの申し触れ声を聞いたので早々に酒津一ノ口へ行ったところ，大水は昨々年の大水より1尺（約30cm）余りも多く見えた。

五ツ半
夕四ツ頃か拙者酒津口出張候所
安江村堤切レ込候由、御代官出張所へ
丈平安江村ゟ帰り来り届候故
拙者帰宅倉鋪会所にて
新田助ケ舟等ヲ下し申候，明[ ]

・夕五ツ半（午後9時）頃か，大橋平右衛門が酒津へ出張したところ，安江村の堤が切れ込んだことを，（酒津の）代官出張所へ（倉敷村庄屋）丈平が安江村から帰ってきて届けたので，大橋平右衛門は帰宅し倉敷会所で新田助け船などを下した。



高梁川嘉永洪水絵図」（早島町教育委員会所蔵）

六ツ前当地へ水湛来り五ツ頃
には大分深ク相成「」
当方宅へは水一ツも来不申
候へ共、八間蔵ノ溝へは水登り
参候、奥座鋪庭へは水一尺
程上り申候、茶園は凡座ノ
下迄参り申候

・（６月４日）六ツ（午前６時）前には当地へ水が来て，五ツ（午前８時）頃には大分深くなった。
・当方（大橋家）宅へは水は少しも来なかったが，八間蔵の溝へは水が登った。奥座敷庭へは水１尺（約30cm）ほど上がり，茶園はおよそ座の下まで来た。

大橋家住宅

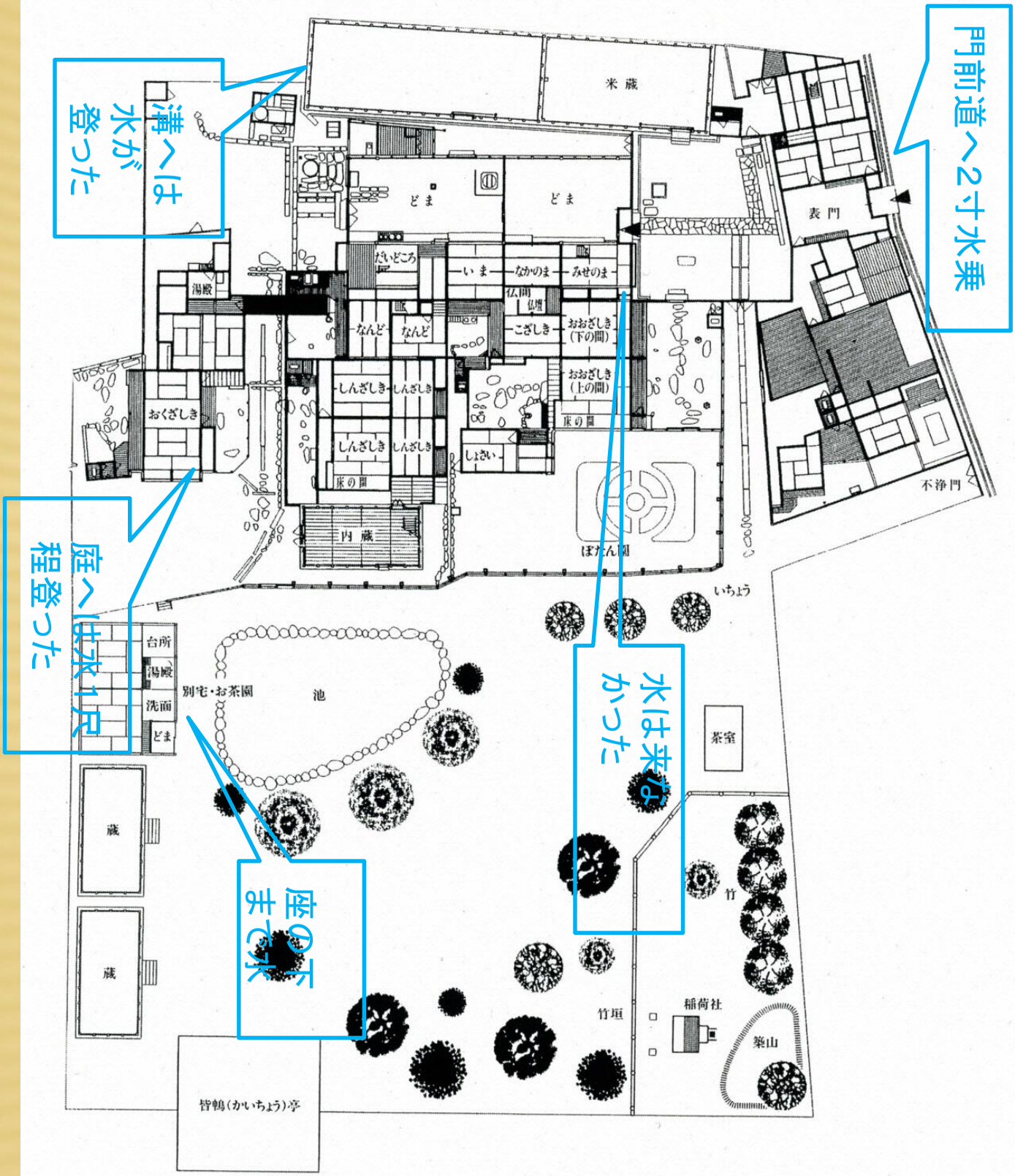


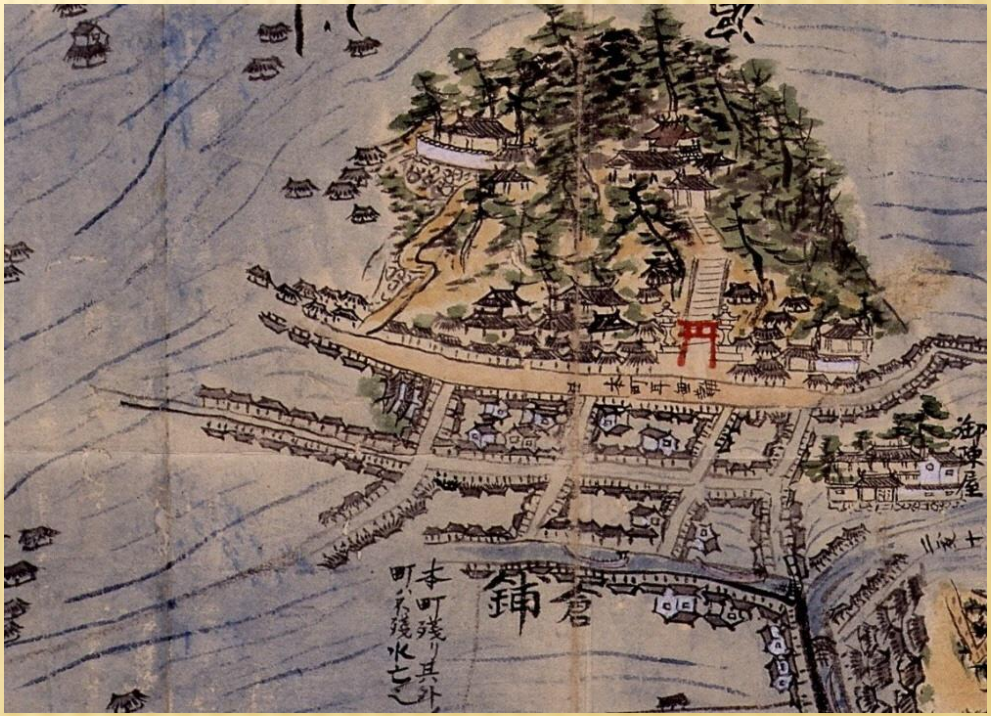
図41　昭和19年（1944）ころまでの大橋家配置図

注：(1)庭園部分は戦争末期空襲時の退避通路にされたが、のちに駐車場に転用された。
(2)「国指定重要文化財　大橋家住宅」より作成。

（新修倉敷市史　第四巻『p669』）

本町へは水一ツも不上、高札場
ゟ以下ツカリ申候、井上町
此方茶園ノ門迄は舟にて
渡海いたし、夫ゟは水誠ニ
ワツカ上り申候、勝之丞方迄
夫ゟ西は水参り申候

・本町へは水は少しも上がらず，高札場以下は浸水した。
・井上町のこの方（大橋家）茶園の門までは船で渡海し，それよりは水がわずかに上がった。
・勝之丞方より西は水が来た。



「高梁川嘉永洪水絵図」（早島町教育委員会所蔵）

東西御墓所水来り不申
一尺程下ニ有之位地高ニ御座候
右ニ付本町東町丈人家無難
あとは皆山へ逃出申候

・東西両墓所には水は来なかった。1尺程下に（水が）あるくらい地高である。
・そのようなことなので，本町と東町だけが人家が無難で，あとは皆山へ逃げ出した。

「嘉永洪水絵図」（倉敷市所蔵亀山家文書58）

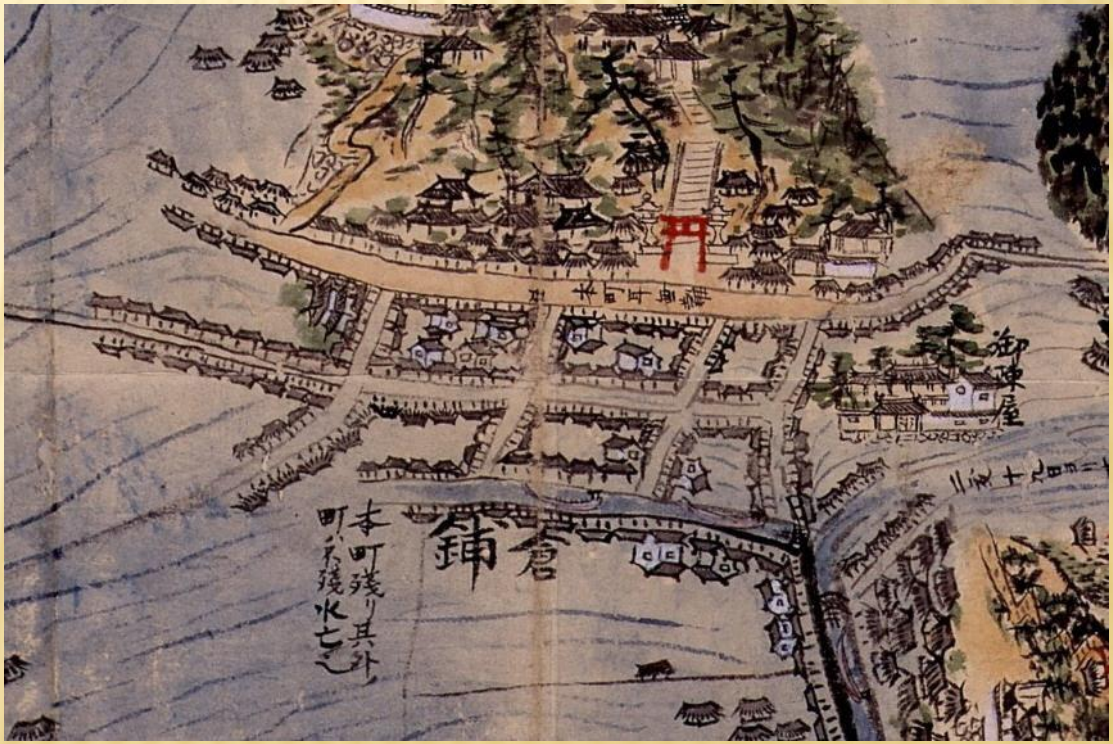
御役所角ノ長屋座上ニノり
御本陣并御役所は地高ニ付
水庭迄ツキ申候、あと御部屋ハ
皆水ツキ申候、広田清吉様
御宅へは庭へ水入り申位少し
地高也、新川・舟倉はかもい
ゟ下タ弐尺程下迄水来り
申候

・御役所角の長屋は座上まで浸水し，御本陣と御役所は地高なので庭まで浸水した。あとの部屋は皆浸水した。
・広田清吉様御宅へは庭へ水が入ったくらい少し地高だった。
・新川・舟倉は鴨居より2尺くらい下まで浸水した。

天保時代倉敷陣屋及明倫館図（『倉紡六十年史』より）

会所座一はい水参り
浜田屋へは水一尺も切レ居申候
井上町は一日座ノ上へ上り申候、
新宅も座限り二[　]、川にし町も
同様二御座候

・会所の座には一杯水が来た。
・浜田屋へは水が1尺も切れていた。
・井上町は1日座の上へ浸水した。
・新宅も座限りに[　]
・川西町も同様であった。



高梁川嘉永洪水絵図」(早島町教育委員会所蔵)

本四日朝ゟ粥ヲ水沢にて
タキ出し、御手代衆ツキ添
新田其外山々へ被遣候計
此方ゟはむすび所々へ遣し
申候、朝ゟ晩迄米ヲ
搗詰メ蒸詰メテモ引足り
不申候計

・4日朝から粥を水沢方で炊き出し，御手代衆が付き添い，新田その外山々へ遣わされた。
・此方（大橋家）からは握飯を所々へ配った。朝から晩まで米を搗き詰め蒸し詰めても足らなかった。

２　倉敷村の豪農商・大橋正直の日記

- 大橋正直の日記
  - 大橋正直の日々の行動と倉敷村中心部の浸水状況，届けられた見舞い品
- 家の記録
  - 「諸日記」「日記」「当座帳」には，水害に関しては，主として大橋家に届けられた見舞い品や大橋家の金銭出納
- 村役人としての記録
  - 「御用書類留」には，水害に関しては，倉敷代官役所から村々への命令，村々から代官役所への報告や願書など，支配をめぐる公式なやりとり